

常陸帯

世阿弥作

前

ワキ 鹿島の神職

シテ 里の男

ツレ（一同） 参詣人

ツレ 里の女

後

ワキ 前に同じ

シテ 鹿島明神

地は 常陸

季は 正月

ワキ詞

「かやうに候ふ者は。常陸の国鹿島の明神に仕へ申す者にて候。さても当社に於て御神事さまぐ御座候ふ中にも。正月十一日の御神事をば。常陸帯の御神事と申し候。今日に相当りて候ふ程に。急ぎ社中に相触れ。御神事を執り行ひ申さばやと存じ候。

一同次第

「是より出でし春の日の。く。宮居の祭いそがん。

シテサシ

「頃は正月の十日あまり。霞みあきらかに日落ちて

万山紅なり。

一同

「実に面白や梅が枝に。来居る鶯春かけて。鳴けどもいまだ薄雪の。朝まつりする神垣や。隔てぬ恵み頼むなり。

下歌

「あら有難や此神に。頼みを深くかけまくも。忝や偽りの。無き御心を頼むなり。く。

上歌

「常陸なる。鹿島やいづく水上の。く。常世の波も深緑。苔のむすきが岩船の。出でしも遠き代々

を経て。国豊かなる今までも。誓ひの船に身を浮
けて。御影を頼む春の日の。今日長閑なるあした
かな。く。

ワキ「時を得て今日の手向か神祭る。正月長閑けき空色
の。手向も同じ袖はへて。貴賤群集ぞありがたき。

シテ「我は又同じ手向の其内に。わきて心も色ふかき。
花田の帯の末長く。契り結ぶの神の御前に。信心
をいたして参りけり。

ワキ「よそ目にはそれとも知らぬ思ひ妻。或ひは花の手
向草。

シテ詞「又は名におふ常陸帯の。面に一首の歌を書く。同
じ世をかけて頼まん常陸帯の。結ぶかひある契り
なりせば。

下歌地「神は偽りましまさじ。人やもしも空色の。花田に
染める常陸帯の。契りかけたりや。かまひて守り
給へや。

上歌

唯頼めかけまくも。く。かたじけなしや此神の。
恵みも鹿島野の。草葉に置ける露のまも。惜しめ
たゞ恋の身の。命のありてこそ。同じ世を頼むし
るしなれ。

ツレ女

「不思議やな手向も繁き其内に。わきて心も色ふか
き。花田の帯のうつくしきを。御前に掛けたる不
思議さよ。よりて見れば歌を書きたり。同じ世を
かけて頼まん常陸帯の。結ぶかひある契りなりせ

ば。心を知れば恋の歌なり。そも此手向に恋心を。
手向けば神も受け給ふべきか。返すぐも不審な
るぞや。

シテ詞

「嬉しやな今までは。つれなかりける御心の。今は
やはらぐ言の葉の。結ぶ契りの末頼もうこそ候
へ。

ツレ

「そも契りの末の頼もしきとは。心得がたき言葉か
な。もし人たがへにてあるやらん。

シテ「何をか包み給ふらん。数書き贈りし玉章の。返事をだにも白露の。身の置き処のなきまゝに。当社に祈りをかけし身の。今日待ちえたる常陸帯の。我にかごとはよもあらじ。

ツレ「そも契りの末の常陸帯とは。御前に見えたる花田の帯に。

シテ詞「書く歌占を一番に。詠ぜん人を妹背ぞと。昔より神の御告なり。

ツレ「昔の事はさもありなん。今は誠を白木綿の。

シテ「神は末世によもあらじ。唯信仰の誠あらば。今も威光はよもつきじ。

ツレ「いやとにかくに言葉づくし。よその人目も恥かしとて。あらざる方へ立ちのけば。

シテ「あら情なの御事や。よし我にこそ疎くとも。

地「神は契りの常陸帯。結びとめさせ給ふべし。恐ろしや疑ひの。神罰あたり給ふな。

ロンギ地

「実に疑ひはあらかねの。島根は是か鹿島野の。神の御心頼むなり。ことわり給へ御誓ひ。

シテ

「是や此東路の。道の果なる常陸帯の。かごとばかりも逢ひ見んと。人陰にたゝずめば。

地

「立ちよる陰も人繁き。手向の袖も様々に。神の御祭あがめよ。

シテ

「よしとても今日よりは。人も我もむつび月の。袖ふれて寄り来よ。

地

「実にや睦月の空なれや。緑立ちそふ青柳の。

シテ

「陰ふむ道に休らひて。

地

「貴賤の群集おし隔て。

シテ

「後影も見えざれば。

地

「せん方もなく。

シテ

「日も暮れぬ。

地

「とにかくに恋はなど。さのみ心を筑波嶺の。このもかのもとに道はあれど。恋の道は迷へり。あらう

たて御神。常陸帯かへし給へや。（中入）

ワキ「是は不思議の神託とて。宮人数々騒ぎあひ。神慮を疑ふ人あらば。心中になどか知らざらん。もしも包まば重ねぐ。其神罰は疑ひあるまじ。悔み給ふな人々と。参籠の中に触れければ。

ツレ「思ひ内にあれば色外に顯はれ候ふぞや。あら悲しや恐ろしや。神慮を疑ふ科により。白蛇の責めを蒙るぞや。あら悲しの御事やな。

後ジテ「神は非礼を受け給はず。水上清しや鹿島の波。

地「御殿しきりに鳴動して。

シテ「御神楽の鼓灯の影。

地「和光同塵もかくやらんと。顯はれ給ふぞ忝き。

シテ「我劫初より此かた。此秋津洲に住んで。其かたち八尺の白蛇と現じ。衆生の明闇を守り。陰陽のなかだちと為つて。契りの末や常陸帯の。かごとなき事を守る処に。汝今更疑ふべしや。

地「疑ふべしや心の馬の。隙ゆく道や神の木綿四手。

結びとめよや結びとめよや。さてこそ契りの常陸帯。

地「報いは常の世の習ひ。いかに廻るも小車の。すぐ

なる道はかはらじ。たゞ狂へく狂女よ。

シテ「そもく恋路に於て。

地「そもく恋路に於て。憐れむべしや。憐れむべしや。陰陽の二神くだつて。天の八衢苔筵の。岩枕

を敷島の。波を払ひねぐらを求め。鵲鴿のつばさにたぐへ。東西南北諸天善神。十方国土を治めしより。恋路の源なれや。汝などかは疑ふべきと。神託あらたに聞えしかば。教への契りの末かけて。かたじけなしや常陸帯の。結ぶ契りとなりにけり。